

必要とされる英語力 と勉強法

海外大学院留学説明会@東京大学 2019年7月21日（土）

広本優佳（東京大学大学院人文社会系研究科）

目次

- ▶ **自己紹介**
- ▶ **人文系が海外留学する利点と困難**
- ▶ **英語の試験について**
- ▶ **大学院入試における試験の使われ方**
- ▶ **試験の対策法**
- ▶ **各登壇者のデータ**

自己紹介

- ▶ 広本優佳（ひろもとゆうか）
- ▶ 東京大学大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻英語英米文学専門分野博士課程
- ▶ 2019年10月から University of Oxford, DPhil in Englishへ留学予定
- ▶ 専門は18世紀－19世紀初頭にかけてのイギリス小説
- ▶ ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）による作品を中心に、当時の小説における歴史の表象の在り方を研究

人文系（文学系）が海外留学する利点と困難

①利点

- ▶ **（利点というより必然）日本の大学院で博士号が取りづらい（取れない？）**
アクセスできる資料数の制約、語学習得の必要性などから東大で博士号は取りにくい（MAだけ海外で取得後、就職した後に年数をかけて東大で博士号をとる例も）。
- ▶ **（外国文化などが専門の場合）資料・史料が豊富**
今まで顧みられなかった文献の発掘によって、研究上の功績を作ることできる（一方で、デジタルアーカイブも年々増加中）。
※自分に必要な文献の探し方：大学図書館や学会のHP、批評本の謝辞など

人文系（文学系）が海外留学する利点と困難

①利点

▶ 「語学の先生」として箔がつく

特にスピーキング、ライティング能力を買ってもらえる（海外在住経験があると仕事の機会が増えることも多い）。

その国の言語文化を幅広く学ぶことは文学研究的にも重要。

※ただし、「語学の先生」という肩書は祝福でもあり、呪縛でもある。
文学研究≠語学習得という問題

人文系（文学系）が海外留学する利点と困難

② 困難

▶ 資金の工面

日本において文学系で取れる海外奨学金の数は他分野に比べて少ない。イギリスの大学院の奨学金を受けられる可能性は低いので、自国で奨学金を得るよう勧められる。

アメリカに比べるとTA制度が充実していない(?)ので、文学系でイギリスに留学するためには（奨学金のほかに）自分で資金を用意する必要も？

※日本学生支援機構の海外留学奨学金のサイト

（http://ryugaku.jasso.go.jp/publication/pamphlet/#link_pamphlet_contents）に様々な団体による奨学金のリストあり。

特定の研究テーマに対する奨学金も存在するので、クリエイティブなネットサーチが必要。

英語の試験について

▶ IELTS, TOEFL

外国語としての英語テストで、四つの要素（Reading, Listening, Writing, Speaking）から構成される。有効期限は二年。

IELTS：それぞれの要素において、0.5刻みの1.0-9.0までのスコアに基づいた採点。かつ4つのスコアの平均が最終的なスコア。

TOEFL：それぞれの要素の満点が30点で、合計120点満点。

▶ GRE

アメリカなどの大学を受けるのに必要な統一試験

大学院入試における試験の使われ方

- ▶ イギリスの大学院ではそれぞれの学科が最低限必要なスコアを設定しており、どちらかという足切りとして使われている印象。
（例 Oxford, DPhil in English : すべての要素で最低7.0かつ最終スコアが7.5）
- ▶ ただし、条件は大学や学科によりけりなので、募集要項をよくチェックすべき。（例 Harvard, PhD in English : 必要条件はないが、高い語学力は強みになる）
- ▶ イギリス留学はIELTS、アメリカ留学はTOEFLというわけでもないが、アメリカではIELTSを認定していない大学もある。
（例 Stanford, PhD in English はIELTSを受け付けない）

試験の対策法（短期的・長期的）

- ▶ テキストを何回も繰り返し解いて形式を学ぶ（試験は時間との勝負）。
- ▶ ライティングサンプルは暗記する（4つの要素の内、特にライティングで苦労しがち）。
- ▶ 単語を覚える（リスニング能力の向上にも）。
- ▶ 先生、友達と会話練習
- ▶ 心の声や独り言をすべて英語にして、英語での発話に慣れる。
- ▶ 気に入った映画やドラマのスク립トを覚える（スピーキングの練習）。

各登壇者のデータ

①スコア

- ▶ 尾花 : TOEFL 93, GRE V150 Q162 AW3
- ▶ 菊池 : TOEFL 115 (R30 L30 S26 W29), GRE V154 Q170 AW4.5
- ▶ 田主 : TOEFL 106, GRE V150 Q170 AW3.5
- ▶ 広本 : IELTS 8.0 (R7.5, L8.5, S9.0 W7.5)
- ▶ 向山 : TOEFL 115 GRE V163 Q170 AW4.0
- ▶ 渡辺 : TOEFL 83-87(?) GRE V310 Q800 A3.0 S930※

※現在とシステム異なる。

各登壇者のデータ

②進学先の合格ラインの大まかな目安

- ▶ 尾花：理系はTOEFL100点あれば大丈夫（Caltechには100点に満たない合格者が複数いる。TOEFLの点数は、UCLAでのインターン経験とアメリカの先生の推薦状によってカバーできた）。Skype面接で語学力が確認されることも。GREはあまり重視されない。
- ▶ 菊池：TOEFL100点、GRE Q168 AW3.5
- ▶ 田主：TOEFL100点、GRE Q170 AW3.5
- ▶ 広本：Oxford英文はすべての要素で最低7.0かつ最終スコアが7.5。最終スコア7.0を条件にする大学が多い印象。
- ▶ 向山：TOEFL110欲しい。GRE V155 Q165 W3.5程度。
- ▶ 渡辺：TOEFLで100点ないからといって足切りされるわけではない。

各登壇者のデータ

③受験回数と大まかな勉強時間

- ▶ 尾花：TOEFLは出願一年前、GREは半年前から勉強し、それぞれ2回受験
- ▶ 菊池：TOEFL500時間ほど半年、GRE200時間ほど勉強。それぞれ5回、3回受験。
- ▶ 田主：TOEFLは出願の年の一月から夏にかけて、GREは一か月ほど勉強。それぞれ3回、2回受験。
- ▶ 広本：IELTSを春に一、二か月勉強。1回受験。
- ▶ 向山：TOEFLは10-20時間（交換留学経験あり）、GREは受験前1か月ほど。それぞれ1回、2回受験（TOEFLはPhD出願前に複数回受験経験あり）。
- ▶ 渡辺：TOEFLは一か月勉強。TOEFL3回受験、GREはほぼぶっつけ本番。

各登壇者のデータ

④効果的だった勉強法

- ▶ 尾花：留学生と英語で会話する会に参加（東大工学部11号館で毎週開催）+Skype英会話+短期留学。GREは問題集一回解く程度。
- ▶ 菊池：McKinsey時代に個人レッスン受講。仕事柄英語を使用していた。GREは公式教材を反復。
- ▶ 田主：伸ばしたい点数による。10点程度なら問題集+ライティングのテンプレートを用意。20点なら英語のクラス受講+短期留学など
- ▶ 広本：問題集反復+独り言英語+学科の英会話ランチ+ライティングサンプル暗記
- ▶ 向山：日本語教科書で概要をつかんだ後、英語教科書使用。GREは単語。テストが近づいたら問題演習反復。
- ▶ 渡辺：いつもpodcastを聞く。

各登壇者のデータ

⑤英語で研究計画を書くときの対策

- ▶ 尾花：まず先輩の計画を参考に日本語で書く。奨学金の場合、審査に専門外の研究者がいることもあるので分かりやすく。外国出身のポストドクの人に英語添削を依頼。
- ▶ 菊池：仕事で英語の文書を書いた経験を活かした。
- ▶ 田主：添削サービス利用。
- ▶ 広本：ネイティブの教員や研究室の院生など、できるだけ大勢に繰り返し見てもらう。
- ▶ 向山：ドラフトができたならproofreadingに出す。英語で論文を執筆している先生に繰り返しフィードバックをもらう。
- ▶ 渡辺：米国大学院学生会のメンターメンティープログラムを利用。

各登壇者のデータ

⑥留学後に必要な英語力

- ▶ 尾花：日本で外国の人と話すのとレベルが違う。マイノリティとしてネイティブたちの中で話す。アメリカ人以外の先生の研究室は留学生が多く比較的楽。入学後に英語試験と場合によっては補修クラスあり。
- ▶ 田主：TAがハード。日常会話は苦労するが、留学生は他にもいる。留学生は入学後に英語の試験を受け、場合によってはライティング、スピーキングクラスを受講（これをクリアしないとTAができない学科も）。
- ▶ 向山：周りはネイティブに近いレベル。ただし、多少会話能力が劣っても、執筆したエッセイなどで取り返せる。
- ▶ 渡辺：英語でのteachingが大変。指導教官の英語の訛りに苦戦。研究に関する議論より歓談の場が辛い。

ちなみに：

⑦留学以前の海外経験

- ▶ 尾花：学部時代に三週間、修士時代に二ヶ月弱（いずれも米国）。
- ▶ 菊池：大学までパスポートなし。学部時代に一学期（米国・留学）、社会人時代に三か月（カナダ）。
- ▶ 田主：学部時代に二週間（ドイツ）、大学院時代に一週間（アメリカ）。
- ▶ 広本：高校時代に一週間（フィンランド・国際交流プログラム）、学部時代に三週間（カナダ・語学留学）、大学院時代に一週間（イギリス・学会）。
- ▶ 向山：3-4歳時（スコットランド・記憶なし）、学部時代に一年間（カナダ・交換留学）。
- ▶ 渡辺：B1、B2の夏休みにそれぞれ二、三週間（それぞれイギリス、アメリカ）。